

4月の観察



ビュンビュン、チーチー、何やら田んぼが騒がしい。昨年に引き続き、ツバメが巣作りの土を取りに来るようになりました。周辺は水田や湿地がなくなっていく一方。ツバメにとっても、貴重な楽園なのでしょうね。



何を観察しているのかというと、オタマジャクシ。だいぶ大きくなりました。そろそろ脚は生えるのでしょうか？どこまで大きくなるオタマジャクシなのでしょう？ 答えは出さずに観察を続けます。



今年もマルベリーが豊作の予感。過去植え続けてきた植物が顔を出し始めています。



上流部に、なんとワサビを植えてみたんです。水辺にはタマシダが仲間入り。フキも増やしてみました。失われゆく自然や近隣の生態までもがいつまでも残り続ける貴重な保護区のように育ってくれると面白そうです。

【余談】

過日の話。企業主導型前の庭づくり最中にふと。
午後、自由遊びをしていた子ども達に「やりたい？」
と、あえてお誘いさせていただきました。

「やるー!」「足りないよ!」
「散らせば隠れるよー!」

体重の半分近くもある砂利を運んでくれたり、工夫しながら敷いてくれたり。

「どう?」
「すごい綺麗!」「楽しかった!」…と。

「ゴミが落ちてたらどうする?」
「ぜったい拾う!」



自ら手がけると、愛着も湧き、大切にしようとか、大事に扱おうとか、そういう心も育まれます。美しいものに包まれたり、本物に囲まれる事は、情操や感性含め、育ちの積み重なりにも自ずと影響はあるでしょう。

しかしながら、まだまだ幼い子ども達は、草花を踏んでしまったり、抜いてしまったり、時には壊してしまうもの。それは、経験でもあり致し方ないのですが、その後に、「一緒に戻そうか」と手を差し伸べ、「元気になるといいね」「綺麗になったね」と作業を共にし、言葉をかける事で、またひとつ美しい心が育まれていくのだと思います。

周囲の大人の行動や発言に、染められていく部分ですね。

園庭やビオトープ。環境や生命。発見し、体験し、考え、知識や経験が様々な方向に広がり続ける日常。

「小学生になっても手伝ってくれる?」「やりたーい!」

そうした活動を始めた意の中にも、いわゆる体験からの学びがあり、活動の中身を工夫する事で、知恵や雑学だけでなく、大切な心の育みもついてくるものだと思います。

スウェーデンやフィンランドの美的感覚に包まれた保育施設を回っていた頃、「遊ぶ事、そして、目に入るものも、そこで過ごす事も、学び。」と話されていたのを思い出されます。

深き学びと、深き教え。包み込む環境の美しさや想いの深さを伝える声かけも大切にしたいものですね。

理事長（元学園長）



学校法人野澤学園
東村山むさしの認定子ども園 GROUP
<https://musashino-group.tokyo/>

